

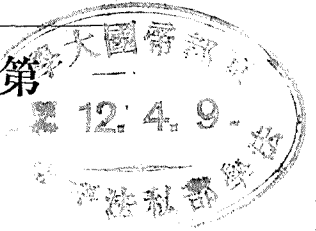
(大正五年四月六日第三種郵便物認可) 昭和十二年三月廿五日印刷納本(毎月一回一日發行)

哲 學 研 究

第 二 十 二 卷 第 四 冊

第 二 百 五 十 三 號

昭 和 二 十 年 四 月 一 日 發 行



實踐と對象認識 (承前)

—— 歴史的世界に於ての認識の立場 ——

文學博士 西田幾多郎

カントの先天總合判斷の最高原則について

文學士 大西友太

感情の存在論的構造 (承前)

文學士 島 芳 夫

十字架と薔薇

—— 一つの解釋の試み ——

ゲオルグ・ラッソン
文學士 平下欣一譯

講義題目其他

京 都 帝 國 大 學 文 學 部 內 部

京 都 哲 學 會

京都哲學會規則

- 第一條 本會ヲ京都哲學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ廣義ニ於ケル哲學ノ研究及其普及ヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲ行フ
- 一、毎月一回研究會ヲ開ク
- 一、毎年公開講演會ヲ開ク
- 一、毎月一回哲學研究ヲ發行ス
- 第四條 本會事務所ヲ京都帝國大學文學部内ニ置ク
- 第五條 本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク
- 一、委員(若干名)京都帝國大學文學部哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者ヲ以テ之ニ充ツ
- 一、書記(一名)委員會ニ於テ囑託ス
- 第六條 本會ノ趣旨ニ賛同スル者ハ何人ニテモ會員タルコトヲ得
- 學校、圖書館、教育會、其他ノ團體ハ其團體ノ名ヲ以テ入會スルコトヲ得
- 第七條 會員ハ會費トシテ年四圓四拾錢、前後二期ニ分チテ前納スベキモノトス
- 第八條 會員ハ本會ノ諸種ノ會合ニ出席スルコトヲ得、且ツ雜誌『哲學研究』ノ配付ヲ受ク
- 第九條 本會規則ノ改正變更ハ委員會ノ決議ニ依ル

京都哲學會役員

委員

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士			
天野真祐	岩井勝二	植田壽藏	白井二尙	小島祐馬	木村素衛	九鬼周造	田邊一元	中井正一	西谷啓治	野上俊夫	羽溪了諦	波多野精一	服部英次郎	久松眞一郎	本田義英	山内得立

前 號 目 次

實踐と對象認識

—— 歴史的世界に於ての認識の立場 ——

文學博士 西田幾多郎

感情の存在論的構造

文學士 島 芳 夫

『命題論理學の歴史』

ジャン・ルカジェウイッツ
理學士 三田博雄 譯

告 會

一、本會へ入會希望者ハ京都市西洞院七條南内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ規定ノ會費(前表紙裏ニアリ)御納付ノ上御申込被下度候

二、會員ニテ轉居入退會等(編輯事務以外ノ一切)ノ事務ハ内外出版印刷株式會社内京都哲學會へ御通知被下度候

三、會費ハ振替口座大阪三〇六三番 内外出版印刷株式會社内京都哲學會宛テニ御拂込被下度候

四、前金切レノ場合ハ帶封三「前金切」ノ印章捺致スベキニ付直ニ御拂込下サレ度候

五、本誌ノ編輯ニ關スル通信及紹介・新刊書・寄贈雜誌等ハ凡テ本會宛テニ御發送被下度候

京都帝國大學
文學部内 京都哲學會

註 文 規 定

◆ 會員にあらざる購讀者の御註文及び廣告に關する件は内外出版印刷株式會社へ御申込下され度候

◆ 本誌の御註文はすべて代金郵税共前金にて御送り下され度候

◆ 振替貯金にて御送金の際は(振替京都三九三一番大阪三九三一番東京三九三一番) 内外出版印刷株式會社宛に願上候

◆ 特に請求書及領收書等を要する場合ハ郵券參錢御送付下され度候

定 價

冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
一	六	十二	十二	十二	十二	十二
冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
前金	前金	前金	前金	前金	前金	前金
四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢	四拾錢
拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢
不申	不申	不申	不申	不申	不申	不申
受	受	受	受	受	受	受

廣告料 一頁 金參拾圓 半頁ハ取扱不申

昭和十二年三月廿五日印刷納本
昭和十二年四月一日發行 第二百五十三號 第二十二卷 第四册

不許複製
禁轉載

京都帝國大學文學部内
京都哲學會
編輯者 京 都 哲 學 會
右代表者 服 部 英 次 郎
發行者 須 磨 勘 兵 衛
印刷者 須 磨 勘 兵 衛
印刷所 須 磨 勘 兵 衛

發 行 所

京都市下京區西洞院七條南
内外出版印刷株式會社

振替口座 京 都 三 九 三 一 番
大阪 三 九 三 一 番
東京 三 九 三 一 番

本社 京都市下京區西洞院通七條南入 内外出版印刷株式會社

(東京) 寶文館 東 京 堂 東 海 堂
(大阪) 寶隆館 上 田 屋
(神戸) 寶文館 盛 文 館 參 文 社
(京都) 大寶文社 川 瀨 書 店

京大教授 山内得立 著

體系と展相

價三・〇〇 送三・三三 菊判クロス 四八〇頁

山内博士の哲學に於て、私達は日本の哲學の辿るべき新しき一つの道が、鮮かに描き出されたことを、信じてはならないだらうか。私達は晦澁な論理のみによつても満足されないし、華美な直観のみによつても満足されない。私達はドイツ的な概念の峻嚴さが、豊かなフランスの直観の透明さと織り合はせられることを願つてゐる。そしてそれが丁度博士の哲學の境地ではないであらうか。そしてまたそれがあらゆる哲學の源泉たるギリシヤ哲學の特色でもなかつたであらうか。博士の論述を通じて私達は、いかにギリシヤ的な思考法が現代的に甦生されてゐるかを驚くのである。幾多の識者の注意を促した「超辯證法」その他の論文は、そのよき證據である。博士はまた自らの立場を「客觀的立場」と唱へられる。しかしその底には深く東洋の無に連るものすら潜むのである。徒らな感激と獨斷に墜し易い「主體の立場」の制限を知る人は、博士の「客體の立場」を尊きものと感ずるであらう。今この多年に渉る博士の勞作の結果を通じて、博士の巨大なる思想の足跡を知り、ひいては我國思想界の動向を知り得ることば、讀者の大なる喜びでなければならぬ。

西哲叢書第五編

近刊

アウグスティヌス

田邊 元 監修

松村 克巳 著

内容目次 第一章 アウグスティヌスの生涯 一、出生二、生立ち 三、カルタゴ遊學 四、第一の轉機——眞理への愛 五、タガステ時代 六、カルタゴ時代 七、懷疑——海を超えて 八、ロマよりミラノへ 九、明けの星 十、夜明け前——肉慾の繩目 十一、回心の直接動因 十二、ミラノの園——回心 十三、カシミアクム時代 十四、受洗の後 十五、アフリカ歸還 十六、ヒツポの説教者 十七、ヒツポの司教——社會の指導者 十八、ドナティスト論争 十九、ペラギウス論争 二十、アウグスティヌスの諸書について 第二章 アウグスティヌスの哲學 第三章 アウグスティヌス哲學の諸問題 一、幸福 二、確實性 三、感覺 四、智知的認識 五、智知的認識の起源 六、光の説と内なる教師 七、魂の本性 八、神の認識 九、信仰と認識 十、愛の倫理 十一、惡の問題 十二、自由意志と罪 十三、恩寵と意志の自由 十四、神と世界 十五、歴史的社會 文獻

價各一・三〇 送各一・四 各三〇〇頁

西哲叢書第三十二編

既刊 マクス・シェーラー

田中 熙著

哲學研究 第二百五十三號 定價金四拾錢 郵税金壹錢

(大正五年四月六日)昭和十二年三月廿五日印刷納本(毎月一回) 第三種郵便物認可(昭和十二年四月一日發行)(一日發行)

弘文堂



東京市寺町丸太町 振替 都京一三二番
東京市神田区駿河臺 振替 東京三五九番